



感性 & 智慧

萩野浩基 著

清华大学出版社

2004/11

665-223

108-3

110



萩野浩基 博士

136075/0601

萩野浩基プロフィール

山陰の小京都、津和野に生まれる。哲学博士（ロ・シ）「東洋的信念体系の再考察」

早稲田大学大学院（政治学）を修了し、玉川大学・共立女子大学・駒沢大学を経て、現在東北福祉大学学長となる。

この間、母校早稲田大学にて教鞭を現在迄とり続けている。

またロンドン大学客員研究教授（外務省幹旋）、アメリカ セントオラフ大学客員教授、南京師範大学名誉教授・名誉理事を務める。国政においては、参議院議員を経て衆議院議員を務める。

方で、教育・福祉・文化・文明をテーマに全国各地域婦人記念大会、沖縄日本復帰記念大会、全国公衆衛生・医学学会など、全国各地でタイムリーな、幅広い講演をする。

「陽のあたらぬところに、陽をあてるのが福祉・教育・政治である」

「哲学・倫理・信念なき人間社会は、羅針盤を失った船であり、科学・技術・政策なき人間社会は帆を失った船である」
「智慧による発想の転換」を信条にした話は、多くの人々に感銘を与えてきた。

主著：「転換期の社会福祉論」（学陽書房）「環境・都市の問題」（教育社）

「世界政治ハンドブック」（有斐閣）「ポスト福祉国家の政治」（早大出版）

「現在ニュージランドの政治」（敬文堂）その他論文著作翻訳多数。

尚、「感性のとき」INSIDE JAPAN・Bilingual（きょうせい）（現在15版）は、世界各国で読まれ、本の博物館といわれるオックスフォード 大学ライブラリーの保存本となる。



まえかき

理念・哲学なき科学は羅針盤なき船であり、科学技術なき理念・哲学は帆を失った船である。

つまり羅針盤を失った船は、その行くべき先が分からず、帆を失った船に進歩はない。すなわち、科学技術と理念・哲学は車の車輪であり、また、一枚の紙の裏表である。言い換えれば、「あるべき姿」(ought to be)と「あるがままの姿」(科学)「(to be)」は特に社会科学・政治学にとっては避けられない研究の姿勢でもある。

人間社会にとって最も密接な政治学において、理念・哲学のめざす「あるべき姿」は現代においてはこれまで重点を置かれたとは言えない。その原因の一つは、科学と哲学は相入れないという考え方が一部に残っているからでもある。しかし、哲学的研究において科学的アプローチが十分なされていないなかったようにも思える。筆者はそうした反省の上にたつてこの研究を進めた。

いずれにしても、時代は待つてはくれない。人口問題、国際問題、そして人種・民族、宗教問題等々、



まさに時代は課題を提出してくる。しかし、現状は迷路に入った観があり、問題をただ先送りしているに過ぎない。今こそあるべき姿と科学的にリアリティックに現実を直視し、活路を見出す瀬戸際に人類はたたされている。

現実の前提は、この狭小化地球の自然環境の中で、異なる風上に根ざす人種・民族が共栄・共存、そして共生しなければならないことである。こうした前提をもとに、今までの世界観、発想にとらわれず、もつとグローバルな視野から発想の転換をしなければならない。まさに、ニュー・ウェイズ・オブ・シンキング (new ways of thinking) が求められている。

現在は、確かに自由で競争の社会かもしれない。しかし、もし人間が「競争のための競争の価値」しか知らないとなれば未来はどうなるであろうか。すでに、解決の目処のつかない問題が次々噴出していき、いずれにしても、人間は一人では生きられないゆえ、社会的・政治的存在である。

競争社会を前提にしながらも、単なる競争指向から調和のとれた競争指向社会への止揚が生まれなくてはならない。

政治学の分野においても、次の時代への羅針盤的新たな価値の創造的研究が求められるべきであろう。ともすればミクロの分野に向けられ、マクロ的・トータル・パースペクティブな視点での研究はなおざりにされた観がある。しかし、巨視的視点からみるにしても、その基礎研究は徹底的であり、科学的であり、歴史的でなければならないことは言うまでもない。



これまで西洋的意識においてヘーゲルをはじめ多くの学者から指摘されていた、東洋の「非歴史性」「停滞性」「専制性」というレッテルの陰に潜む東洋思想の信念体系の意味するものを、まず機能的に捉えようと努力した。さらに、単に観念的に捉えるのではなく、現実のダイナミックな世界に引き下ろし、機能的に有効なものが東洋にあるならば、次世代のために示そうとする基礎研究の一試論である。

これまで、思想・哲学・理念として抽象的に論じられた分野を、筆者の新たな独自のバイアス(Bias)理論でもって科学的・実証的に説明しようと試みた。

こうした研究が引き金となって、ますます重視されるアジアの世界への貢献の精神的支えの一助になればという筆者の願いを込め研究は展開された。

西洋的意識で東洋を見る立場を取るなら、お互いは傷つくことになる。西洋はもっと東洋の持つ特性を深く正確に捉え、また、東洋は西洋の科学技術性を把握し、そのお互いの正確な認識に根ざした共栄・共存・共生の道を、今こそ再考察するときと思われる。

この研究が、地球的規模に立つグローバルな政治的共同体への政治理念の基礎的研究の引き金となることを願っている。

二〇〇一年十二月

萩野 浩基



目次

まえかき 5

第一部 感性と智慧——現代を観る視座

第一章 二十一世紀を生きる智慧 11

第二章 教育の重要性 27

第三章 なぜ今、教育 34

第四章 心の栄養——感性教育 41

第五章 子供が訴える 46

第六章 福祉と感性 53

第七章	科学技術文明と現実	59
-----	-----------	----

第八章	東洋と西洋	64
-----	-------	----

第九章	未来を観る	69
-----	-------	----

第二部 東洋的信念体系の再考察

——古代インドを中心として

第十章	信念体系に関する研究	77
-----	------------	----

第一節	研究の視角	79
-----	-------	----

第二節	信念体系研究の新たな角度	105
-----	--------------	-----

第三節	本論のめざすもの	112
-----	----------	-----

第四節	新政治学の誕生	118
-----	---------	-----

第五節	東洋研究の流れ	129
-----	---------	-----

第十一章	インド古代社会の政治生活状況と仏陀の信念体系との関係	137
------	----------------------------	-----

第一節	インド古代社会の政治的共同体の状況と構造観察	137
-----	------------------------	-----

第二節	インド古代の政治的共同体の政策決定機関の構造分析	140
-----	--------------------------	-----

第三節	インド古代の政治的共同体と仏陀	145
-----	-----------------	-----



第三部

仏教と儒教の融合——古代中国を中心として

第四節	サンガと政治状況	151
-----	----------	-----

第十二章	アショーカの政治的リーダーシップとその「寛容」思想	159
------	---------------------------	-----

第一節	アショーカの政治生活の考察視角	159
-----	-----------------	-----

第二節	アショーカの政治意識の形成過程における仏陀の信念体系の影響	162
-----	-------------------------------	-----

第三節	アショーカの政治意識	166
-----	------------	-----

第四節	アショーカの政治過程と構造分析	175
-----	-----------------	-----

第十三章	古代中国の政治と信念体系	193
------	--------------	-----

第一節	「春秋」「戦国」期の政治生活と倫理観	194
-----	--------------------	-----

第二節	その政治姿勢が文学に及ぼす影響	201
-----	-----------------	-----

第十四章	儒教の政治理念の特色	203
------	------------	-----

第一節	儒教学派の形成と発展	203
-----	------------	-----

第二節	孔子の信念体系に見る思想	208
-----	--------------	-----

第三節	孔子の目指す理想的社会——大同の世界	210
-----	--------------------	-----

第四節	孔子の政治生活の特質	212
-----	------------	-----

第五節	孔子の文学へ与えた影響	216
-----	-------------	-----

第十五章	仏教と儒教——衝突と融合	218
------	--------------	-----

第一節	仏教の中国への伝来	219
-----	-----------	-----

第二節	仏教と儒教の衝突と融合	221
-----	-------------	-----

第三節	古典文学に於ける仏教と儒教	224
-----	---------------	-----

第十六章	考察の結びとして	232
------	----------	-----

終わりに——東西文化の融合をめざして

図		247
---	--	-----

注釈		252
----	--	-----

参考文献		269
------	--	-----

第一部

感性と智慧——現代を観る視座



第一章 二十一世紀を生きる智慧

八つあんのまたがった暴れ馬があつちこつち蹴飛ばしながら猛スピードで走ってくる。

「おーい！ 八つあんよ！ そんなに急いで何処へ行く！」

「俺にもわからん！ たのむ馬に訊いてくれ！」

人はひとり 生まれ

人はひとりで死んでゆく

そんなにいいそいで何処へ行く

一刻の生 一刻の死

二度とない人生ゆえ

ゆっくりゆこうよ

喧騒の世を



「自己をはこびて万法を修證するを迷とす、万法すすみて自己を修證するはさとりなり。」（正法眼藏・現成公案）

（狭く、限りある自己の浅い経験を尺度として、大自然・大宇宙の摂理を觀ようとすれば、迷の道を生きることになる。大自然・大宇宙の摂理から逆に小さな自己を照らし写して觀れば、生きる未来への道が觀えてくる。）

「哲学・理念・倫理なき人間社会は羅針盤を失った船であり、科学技術・政策なき人間社会は帆を失った船である。」

政治経済の現実には真つ暗な荒波の海に浮かぶ羅針盤を失った一艘の船に見えてくる。

人類は何を基軸に、何を信じ二十一世紀を生きようとしているのか。哲学と先端科学技術は、今を動かし未来を決する政治的人間社会の両輪である。全てにおいて「生きる智慧」を人は求めてやまない。人は等しく「いやし」を求めている。

時代は課題の提出者と言った古典哲学の總括者ヘーゲル(G.W.F. Hegel)の言葉が真実味を帯びる。

民主主義の成り立つ大前提は自己実現を目指す自律的個人・自律的人間の存在である。この自律的個人という前提が崩れれば、無責任な喧騒の社会となり崩壊過程を歩むことは歴史の示すところである。

二十世紀では当然として考えられ通用し、信じられていた価値のスパン（物差し）・パラダイムが音



を立てて崩れていくのを感じる。例えば自由と平等、人権、ヒューマニズム、個人主義、民主主義等々は果たして二十一世紀においてもなお信じて疑いないものであるうか。

混沌とした現実を前に、政治にも、経済にも、哲学が必要と人は言う。巷では「景気」「景気」との悲壮な声を聞く。便利で能率的、且つ物質的に豊かであれば幸せがくると追い求めたつげがついにまわってきた感がある。すでに大きな歪みが至る所に生じ負の面の露呈を気付かずにはいられない。

未だに正義の名の下で物理的強制力に頼る世界。マスメディアによりメンタル操作される世界。オウムにみられるように、いともいかがわしい宗教に走る知識の豊富な若者達の世界。汗を流さずゲーム的金融操作に頼る世界。また、今日における病気の原因の八割以上はストレスの集積にあると現代医学は告げている。全てに「不安」の二文字がある。現代人はストレスと不安の中で生きざるを得ない。人も世界も信じるに値するものを求めてやまないのが今日である。

深刻な経済的挫折により急激に増えた死に走る多くの中高年。右肩上がりの経済神話を信じすぎたからであろうか。人間の知的力と生産力を過信しすぎたからであろうか。

今、何を改め、何の実現を目指し、何を次の世代にバトン・タッチするかのにぎりぎりの選択の時に立たされている。

金融ビッグバンやデリバティブによる経済環境の変化が経済活動を根底から揺さぶっている。汗して働かず、株や通貨の上がり下がりに一喜一憂し、マネーゲーム的賭けに走っているような経済の実態。



人間としての自己実現と経済生活がアンバランスになっている。

構造的金属疲労から揺らぐ日本の政治・経済の現実。皮肉にも便利・豊かさを求め、大量生産・大量消費により、山のように都会から出されるゴミ処理の中から生まれたダイオキシンなどの新たな地球環境汚染。

二十世紀は既に数万種に及ぶ新たな化学物質をこの地球に出現させた。この狭い地球の生きとし生けるものはその悪影響を受けないはずはない。

全てに得をする権利を人間は与えられているのであろうか。

人体に影響を及ぼす環境ホルモンは人間の生殖機能を狂わせ、人間の生存そのものを脅かしている。

酸素を作るアマゾンの森林やアジアのマングローブの全滅危機、そして元来有機的に生きていた母なる大地の死、急激に進む砂漠化。

また社会的には、すぐに「きれる」症候群に象徴される犯罪の急増、そして夢のない子供の自殺。子供の自殺も大人の自殺も多発しすぎる故にニュースの価値を失い、恐ろしいことに闇の中に消えている。

血で血を洗う民族間の戦争は終わりを知らない。そして外に向かつては物理的強制力の究極としての「核」、そして内に向かつては「クローン」という人間改造術による臓器の部品化。

全て「心」の不在の世界。老いも若きもみんな不安の中で「心の栄養」「癒し」を求めている。経済では計れない別の価値ある価値を見いだす、人間が本来持っている「感性」を失いかけている。食の栄